

見守りや自立支援に

介護ロボットフォーラムに 650 人

高齢者や障害者の自立や介助を支援するロボットの展示説明会「介護ロボットフォーラム 2016」が3月1日に都内で開かれ、福祉施設関係者など約 650 人が来場した。厚生労働省（以下、厚労省）が進める「福祉用具・介護ロボット実用化支援事業」の一環で、テクノエイド協会が主催したもの、既に商品化されたり販売開始が予定されたりしている 24 社の介護ロボットなどが展示された。

来場者の関心を集めたのは、居室の利用者の状況をシルエット画像で離れた場所から認知できる「見守り支援センサ」や電動アシスト機能付きの「歩行支援ロボット」、デイサービスなどのリハビリテーションを主導する「コミュニケーションロボット」など。実際に試用したり、メーカー担当者から開発コンセプトや特徴などを聞いたりする姿が多くみられた。

また厚労省と経済産業省の行政報告や、介護ロボット導入施設などからの成果報告なども行われた。

厚労省の小林毅・老健局高齢者支援課介護ロボット開発普及推進官は「介護ロボットはセンサー、制御系、駆動系があることが条件。大切なのは職員の負担軽減だけでなく高齢者などの自立支援に役立つこと」などと述べた。フォーラムではこのほか、介護ロボットを導入した好事例の表彰も行われ、全国から応募された 95 件のうち、社会福祉法人野の花会（鹿児島県）が最優秀賞に選ばれた。リフトなどを使って負担の少ない介護をしていることに加え、装着型パワーアシストスーツ「HAL[®] 介護支援用」を導入して排せつ介助などでも抱え上げない介護をしていることが評価された。

（福祉新聞・第 2802 号 2017 年 3 月 13 日）